

# 回遊性・連続性に優れたたまちづくり 語り継がれる歴史物語都市を目指して

みやしまさきのが  
宮島雅展  
甲府市長

## 「開府500年」現在の積極的な変化

平成21年に市制120周年の節目を迎え、平成31年には開府500年を迎えようとしている山梨県の県都・甲府市の中心市街地が、今、大きく変わろうとしている。

それは例えば甲府駅のホームからも実感できる。ホームの上り方面前方に立ち、北側を望むとすぐ目の前に、甲府(舞鶴)城の山手御門を忠実に復元した歴史公園(平成19年3月完成)が見える。また歴史公園から目を右前方に転じると「甲州夢小路」という看板が壁に掛かった長方形の建物が見える。この建物は仮設だが、目下、電動アシストサイクルを30台そろえた「レンタサイクル甲府」(平成21年10月設置)になっている。平成23年度中にはこの場所に古民家が移築され、飲食店や地場産品関係のショップなどの入居する歴史観光型集客施設・甲州夢小路に生まれ変わる予定

だ(完成は平成24年度)。

さらに歴史公園とは跨線橋を挟んで左側の敷地一帯では、駅周辺の大規模な土地区画整理が行われている様子が目の当たりにできる。これらの事業の詳細は後述するが、変貌しようとしているのは駅周辺地区だけではない。

甲府市の中心市街地はJR甲府駅を挟む駅周辺区域(北口側・南口側)と、そこから南部に向かって広がる舞鶴城(甲府城)公園の周辺、さらには市役所や県庁などの行政機関・金融機関・企業等が集積する業務区域、古くから栄えてきた中央商店街をはじめとする商業地区などで構成されている。

甲府市ではこの広範囲な中心市街地を一体的に再開発し、まちなかの回遊性や連続性を持たせる大規模かつ多角的な事業が、平成19年度あたりから着々と完成し始めている。さらに平成22年度から24年度をめどに、主要事業は一斉に完結する予定だ。

「都市としての甲府の骨格には、今から約部分が経年劣化し、都市としての発展を阻害するとともに、その都市が本来持っている良い要素をも埋没させているというケースは多い。甲府市においても少なからず、そうした傾向はあったようだ。

実際、昭和50年代ごろまで県下最大のにぎわいを見せた甲府市の中心市街地は、昭和60年代から平成に入ると次第に陰りを見せ始める。特に近年は回遊性や連続性などの再構築も含めた抜本的な対策を講じない限り、商業地区や業務地区における集積度がさらに弱まり、空洞化への動きはとどまらないことが明らかになりつつあった。

## 市民協働でつくる 生き甲斐都市・甲府

市長の言葉にもあったように、中心市街地の北部(駅北口側)には、武田信玄の父・信虎が甲府を1519(永正16)年に開いた折に武田氏の拠点と定めた武田氏館(躰躰ヶ崎館)の跡がある。さらにこの場所に後に建立(1919年)された武田神社(祭神は武田信玄公)、1558年創

建の善光寺(甲斐善光寺)など、近世以前に成立した史跡を中心に武田氏の関連史跡が数多くある。それに対し南部側は、豊臣系大名が



16世紀後半に建立された甲斐善光寺の巨大な伽藍



甲斐善光寺で出会った観光ボランティアの市民



武田信玄公の本拠・武田氏館跡は甲府開府の拠点

で中心部がいったん壊滅状態になったとはいえ、中世から近世にかけて成立した城砦都市以来の歴史を持つ欧州の現代都市になぞらえれば、現在のJR甲府駅を挟んだ北側が中世に成立したオールドタウン、南側が近世以降に成立したニュータウンとしての性格を持っているともいえるだろう。

「私は甲府市のそうした特性を、良い方向に生かした上で到達すべき将来的な都市像について、端的に言えば『歴史物語都市』として生きていくイメージを描いています(宮島市長)

歴史物語都市とは、そこで暮らす人々がわがまちの歴史を自分たちにとって掛け替えのない、大切なものとして語り合い、なおかつ未来へ向かう夢を同時並行で語り合っているようなまちだという。古くから伝えられてきた歴史の上に現代があり、そこを足場に未来を無理なく語ることでできる都市。市民が語り手・つくり手として参加し、「構築されて

なお、拠点形成区域のうちの8・1haはシビックコア地区連携機能地区となっており。そこには前述の「甲府市歴史公園」(仮称)よっちゃばれお祭り広場」も組み込まれるが、今後、甲府地方合同庁舎(仮称)(平成23年度完成予定)、NHK新甲府放送会館(平成23年

に中央消防署(平成19年2月完成、1633㎡)、自転車駐車場(平成19年8月完成、784㎡)、国指定重要文化財「旧睦沢学校校舎」を武田神社境内から北口駅前に移築した「甲府市藤村記念館」の設置(平成22年7月完成、189㎡)のほか、冒頭で少し触れた甲州夢小路事業(3224㎡)も平成24年度中に完成する。また藤村記念館の前は市民や観光客の多目的交流空間(仮称)よっちゃばれお祭り広場」(平成22年度完成、4827㎡)になる予定だ。



甲府地方合同庁舎、NHK新甲府放送会館などが建設される甲府駅北口のシビックコア地区

行いやすいよう、基準階の開閉窓や中庭、(宮島市長) その「甲府らしさ」は外装と機能によく現れている。具体的には自然光をより多く取り入れるためにガラスを多用。自然通風を

「新庁舎は地上10階、地下1階。建築面積5750㎡、延床面積2万8450㎡です。使いやすい、分かりやすい、安全・安心な庁舎を目指しています。また旧庁舎にはそのような余裕はありませんでしたが、新庁舎は中心市街地一帯の回遊性を意識したまちづくりの拠点施設ととらえています。そのため市民や観光客が気軽に立ち寄り、利用してもらえスペースを用意し、随所に甲府らしさを意識した設計を心掛けました」

階(本年5月の連休中に移転)である。

老朽化した市役所庁舎の建て替えも中心市街地活性化の一つの事業に位置付けられており、平成25年5月に供用開始の予定だが、現時点では統廃合で空いた小学校の校舎や校庭に建設したプレハブの仮設庁舎などに、市役所機能の分散移転を済ませた段階(本年5月の連休中に移転)である。

## 回遊性の拠点づくりの 新庁舎・商業地区

度完成予定)、県立図書館(平成24年度完成予定)も新規に整備される。その他、シビックコア地区の施設としては既設の山梨文化会館(情報文化発信基地)、ベルクラシック甲府(パークレット・コンベンション施設)も含まれる。



全国から参加者を募って毎年4月12日の武田信玄公の命日に開催されている「武田24将騎馬行列」



武田信玄公を祭神とする武田神社には全国から老若男女が訪問

に市民ニーズを徹底的に精査した。その結果、現状の中心市街地には次のような課題解決の必要性のあることが浮上した。  
①郊外にはない中心市街地ならではの魅力を持った商店街の再生  
②歴史文化や地域資源を活用したにぎわいの再生  
③都市機能のより一層の向上による定住の場としてのまちづくり  
④市民や事業者など、すべての人による主体性ある参加  
これらの課題を踏まえ、甲府市中心市街地活性化基本計画のテーマである「自分参加(市民協働)でつくる 生き甲斐都市こうふ」を決定し、さらに、本市の目指す中心市街地実現のための基本方針が次のように定められた。  
①買い物場として楽しめる中心市街地の



紅梅地区の旧オリオン通り商店街は改修後、オリオンスクエアという名のショッピング街になる予定

吹き抜け、換気ボイドなども適宜設備する。さらに名産のブドウ棚をイメージした太陽光発電パネル、地中熱を熱源として活用する装置も設置されるなど、エコを意識したさまざまな工夫が凝らされている。  
「新庁舎は来年のなるべく早い時期に起工する予定ですが、閉庁している週末には駐車場スペースをイベント広場的に活用していただいたり、会議室なども空いているときはほとんど市民が活用できるような仕組みを考えようと思っています。環境にも配慮し、周囲との回遊性・連続性を心掛け、中心市街地の活性化に市役所庁舎が重要な役割を果たすようにしたいというのが、私の希望です」(宮島市長)

「新庁舎は来年のなるべく早い時期に起工する予定ですが、閉庁している週末には駐車場スペースをイベント広場的に活用していただいたり、会議室なども空いているときはほとんど市民が活用できるような仕組みを考えようと思っています。環境にも配慮し、周囲との回遊性・連続性を心掛け、中心市街地の活性化に市役所庁舎が重要な役割を果たすようにしたいというのが、私の希望です」(宮島市長)

②歴史や文化にふれることのできる中心市街地の再生  
③定住の場として選ばれる中心市街地の再生  
そのような観点に留意しながら、甲府市で一体的に実施されている中心市街地の大規模な再生事業の現場を歩いてみた。最初に向かったのは甲府駅周辺の整備地区である。土地区画整理の面積は21・9ha、拠点形成の施工面積は25・5haにも及ぶ。  
甲府駅周辺の具体的な拠点形成の整備事業としては、冒頭で述べたように甲府市歴史公園(6039㎡)がすでに完成している。さら



商業地区を象徴する新名所になることが期待される建設中の紅梅地区再開発ビル



「歴史を感じさせるまち」の象徴・甲府市藤村記念館(国指定重文、甲府駅北口前)

的な俳論だ。五七五という極端に短い詩形を持つ俳句は、常に新しい表現方法や季語などが追究されなければ類型化しやすい。常に革新(流行)されていかなければならないさだめを持っていてといえる。一方、俳句が俳句として成り立っている原則、すなわち五七五の詩形や季語などの原則は不変の鉄則(不易)として大切にしなければならない。



サッカーJ2リーグのヴァンフォーレ甲府の応援は市民を一つにする。同チームは商店街活性化イベント等にも積極的に参加

幹線道路である平和通りで結ばれている。また市役所を經由して左に曲がればすぐ、中央商店街をはじめとする商業地区に達する。前述のように商業地区の空洞化解消も大きな課題だ。特にかつて大きなにぎわいを創出していたにもかかわらず、空洞化の激しい紅梅地区・オリオン通り商店街は、長年親しまれてきたアーケードを撤去。フアサードの改善や店舗の改装などを進めているほか、隣接地には商業地区全体の拠点ともなる複合施設の建設が、平成22年度の完

成を目指して進められている(仮称・紅梅地区再開発ビル)。

この紅梅地区再開発ビルは地上20階、地下1階の高層ビルで、商業施設、住居(104戸)、県立宝石美術専門学校、駐車場などの機能を併せ持つ予定だ。

甲府駅周辺地区から市役所を經由し、さらに紅梅地区を經由してそのまま駅方向に進めば、舞鶴城公園を経て甲府駅に達する楕円形の回遊コースとなる。取材の過程においては駅北口でレンタルしている電動アシストサイクルを活用。この回遊コースを周回してみたが、これだけの規模で同時に活性化のための開発事業やその準備が進んでいる様子は、やはり壮観だ。それを目の当たりにしただけで早くも活気が内側からにじみ出てきつつあるようにも思われた。ただこのハード面の整備を、真の意味での持続的な活性化に結びつけるためには、やはり関係各方面の強い自覚が求められることは言うまでもない。宮島市長もその点が最も重要だと語る。

「常に活性化されている中心市街地には、特定の法則があると私は考えています。例えば商店街を例に取ってみれば分かりやすいでしょう。いったいどういう商店街が栄えるのか。その条件は3つあります。1つ



一日借りて400円の電動アシストサイクルは観光客の人気の的(甲府駅北口)



歩行者道路・自転車専用道路が明確に区分された市街地(平和通り)

### 真の意味での活性化を獲得するために

宮島市長はさらに、重層的な構造を持つ歴史物語都市をつくるためのキーワードとして「不易流行」を挙げる。不易流行はご承知のように松尾芭蕉の代表

して変えなければいけないものとは、時代の変遷と共に変わらなければ取り残され、陳腐化してしまうものを指します(宮島市長)

実際、機能的で魅力的な都市には常に、不変なものや絶えず変化しているものが渾然一体となつている。換言すればその不変であるべきものと、変化しなければならぬものとの見極めを正確に見据えたまちづくりをしなければ、都市という生き物には必ず停滞やほころびが生まれてくるということだろう。

とここで都市経営において「不易」であるべき要素には、中心市街地の活性化とは別にもう一つ重要なものがある。それは地域の宝である子どもたちの健全な成長を実現するための絶えざる環境づくりである。

甲府市が第五次総合計画に掲げる目指すべき都市像は「人がつどい 心がかよう 笑顔あふれるまち・甲府」というものだが、これまでリポートしてきた中心市街地活性化事業はまさにその都市像を実現するための仕組みづくりの一つともいえる。また中心市街地活性化事業が目指すのは、地域のにぎわい創出と同時に、それによって「市民による地域愛をさらに喚起する」(宮島市長)ことにもある。そして平成21年10月、市制施行120周年記念式典で発表された「甲府 きょういくの日(教育・共育・郷育)制定」こそは、子どもの健全育成を目指し、甲府市における市民の地域愛を育むもう一つの仕組みづくりといえる。

「きょういくの日」事業の本格的な実施はま



甲府市のB級グルメとして人気上昇中の「甲府鳥もつ煮」

だこれからだが、甲府駅北口のシビックコア地区に移転した藤村記念館などを活用しながら、生涯教育推進プロジェクトとして文化・歴史・芸術・スポーツなど多角的かつ健全な子ども育成のための諸事業が予定されている。

今回のリポートでは詳細にご紹介できなかったが、甲府市では現在、平成31年の「開府500年」を目指して、甲府市のルーツともいべき武田氏館跡(躑躅ヶ崎館跡)などの文化・歴史資源整備事業も併せて実施している。この文化・歴史資源整備事業と共に「きょういくの日制定」にまつわる地域愛育成のための事業も、今後、一連の中心市街地活性化事業が目指す「真の意味での地域の持続的活性化」を支える、重要な事業となるように思われる。

健やかに育った子どもたちが次代の甲府を担い、地域の活性化を持続する原動力となる。その積み重ねがまた将来の新しい歴史を構築する。市長の言葉にあった「語り継がれる歴史物語都市」の実現のためにも、それは重要な連鎖を形成するに違いない。最後にほんの少しだが触れさせていただいたゆえんである。

(取材・文 遠藤隆)